教訓郷里の東雲巻之中

江戸　芽出満人改

為永春水輯

松亭金水稿本

葉櫻の段

伊勢の海に詣る蜑のらけるもや心一つと定め

ろわろぼ。昔の人の口

えより一時の戯ぶみ

雅彼と。道端の小便溜

嫌ひもろく。益夜三分ばかり

一分八一分二朱八二朱。令ざるの光る家癪の本を
そんぢ　　　　　　　　　　　　　　　　　　
もつ　令ざる妓女ら妓女が令ざる悟
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
　高。こゝ本来一物。迷つくる
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
の和尚の毛がまぐる
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
まぐふて口紅の。裂れ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
筆を伝りに嘘八百
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
文八。中
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
羅より。宝家
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
これ
曼陀羅ぶの。宝家
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
八門藤八房の蕃椒
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
小金の名命よ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
う。何より
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
辛ひ。浮世に惜まぐ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
浅令と
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
つくひ損ふ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
八此こち

るゝ。そんなに。おもふ人ゝ。あと先。えぞ
にくる。老の。おもひ。の外。分別ざかり
方様。城下。ふ林つく親司。
おむ人。おもふ。又通ぎこそ。
ゝゝる。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
ぶゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

あぢさゐ詮方もなきの一人あらん。
はきる胸のうち。殊ふ
時二郎八親がく
緑者も。
高
なくまこ
あのも恋のくせ
居らればこそ
特
家と要時
隠し
下
動定。十両
勤定して

表徳にて音のおくり僧促わるく潜つひ訳ゐ
今ハ格子さしたる夜のだんハ格子さしたるもおくく
ゆるすなどいうそせろまくく仕まつることそ
げろりろり。まくに三年ゑど前よりして、浦里が方へ
まる家もや源蔵さて、本郷ろうんの
酒屋の主あるじを太つこ兎車風流の時二身にハ似てもかる男
ろねそのお志ハ優くて四季折々も相応よ心を

つの盈ちて世估そう。今こそお
るまでぞ。延引するれば
義ぐ。色々と厚き遠ふ絆さ
て。末ハ女房
て。座敷
より
ハ女の平生外ふ
通ひ
心弱き
客も多く。
初めの間ハ
る
女
ハおそれ
のきと
親元へまで渉
ら
浦里ハ妓女
と深ぐ
夜
三

ても。断(ことわ)くり見世(みせ)へ出(で)ゐる思(おもひ)ぎ
やうもなく。番頭(ばんとう)女郎(ぢよろう)にあしらはれ
こまんいそんでゐる。江戸(えど)びらきをさそふ
も胸(むね)のうち。ぞうしこと哀(あは)でゐる時(とき)さんネがう添(そふ)
やう。どうぞ始終(しまう)の呼(よび)ハ。ぬしうち人(ひと)往(ゆく)
末(すゑ)かたく受人(うけにん)ハ子供(こども)餌(ゑ)より。郭通(くるわかよ)ひ
妓女(おいらん)乳(ち)のと有(あり)ふこと。さればさの胸(むね)せまり。
時(とき)二郎(じろう)ふ

夫して巧を
一生の。
書際
りと。
まで
に組草
ろや
ア
主方
ふ
ふ
ふ

夫して巧を
一生の。
書際
りと。
まで
に組草
ろや
ア
主方
ふ
ふ
ふ

夫して巧を
一生の。
書際
りと。
まで
に組草
ろや
ア
主方
ふ
ふ
ふ

夫して巧を
一生の。
書際
りと。
まで
に組草
ろや
ア
主方
ふ
ふ
ふ

夫して巧を
一生の。
書際
りと。
まで
に組草
ろや
ア
主方
ふ
ふ
ふ

こゑ有
ごぜう
此処
や母う
渡内
ゑふハ
そそて
吉ハイ




十六日

にっれ二階へゆく階へゆく苦らうぶろうと。

るえざのくてもきもてもてもの文づくひをつかの特まとあろ。

ぶろうまいまたまたまた

お助もの。夫にもちとお特(とく)の御(ご)用(よう)逢(あ)もの下(くだ)さりまえで。ござ
私(わたし)をあげ下(くだ)さりまし。ぞうぞ。ちと一筆(ひとふで)御(ご)用(よう)と
下(くだ)さるやうに。そこそこ。ろに
ありまして。ちょっとトいふ。失(うせ)もよく
文(ふみ)を披(ひら)いてよこす。ホまた逢(あ)
いそうもあるまいとトいふ。添(そ)ひ寝(ね)は
どそこ。ろろ。今(いま)宵(よい)は逢(あ)いそうもあるまいとトいふ。
いろ〳〵。徃(ゆ)てきてとも。あるぢ。商賣も

いそぐしく。何ふ
吉ぞんふ。夫ふりにて
評判ぢの。実公ハなや
ふけぢが。まゐ三そうゑ
ふもふ昔の紙
ふ。五日ふ十日
ふそれも。今ハモウふ
ふくふる麻をつくて。
さすとふ去年ふ

きんど
三三度ぐらゐ
初まりやアーわ
時くらゐ
する世話をして。
わ人が。
て参ります
ちやア。そんな人に

ざりまする里より
のもらひて来ると申入ぢやうも。まんざら待のわ人。
ござらぬのも。其うちよくく待まれよ。
あつて。まんざら待のわ人。
計をいふ物でも
なけれど。
こゝろ安げなるけしきやア。棒ねどゝもいそがわ人
何もそこと空とぼけしらるとおぢやれ
おぢやれとくらおぢやれ

何も私がおかくしやアどざりませんが。実どもに甘えが。実どもに甘えまするふをもはおまえさまのおそうのくばそのおかげをもちまして大きなる声をもつ小僧やアどざりまするが。今朱まつことをもつ初をそるのものをもの甘くまするとも朝ら

ひるのごろうーこ。まぐろうち其処へ持ていく所でござりまする。早くおあがりやアどざりまするが。今朱まつことをもつ初をそるのものをもの甘くまするとも朝ら

あの女中
おくせうぜ。附木
吉どん何も
わへ
今晩はイヤ旦那様
八ツ半頃ハちやと急ぎ
芳さんそうらうまぐ
ぶそくまぐあんと
吉どんハ内みろぐ
ぶそくまぐあんと
吉どん
に乳
飲ぐ
飲ぐ。
大生酔
大生酔
乳
飲ぐ
飲ぐ。
保「土瓶
保「土瓶

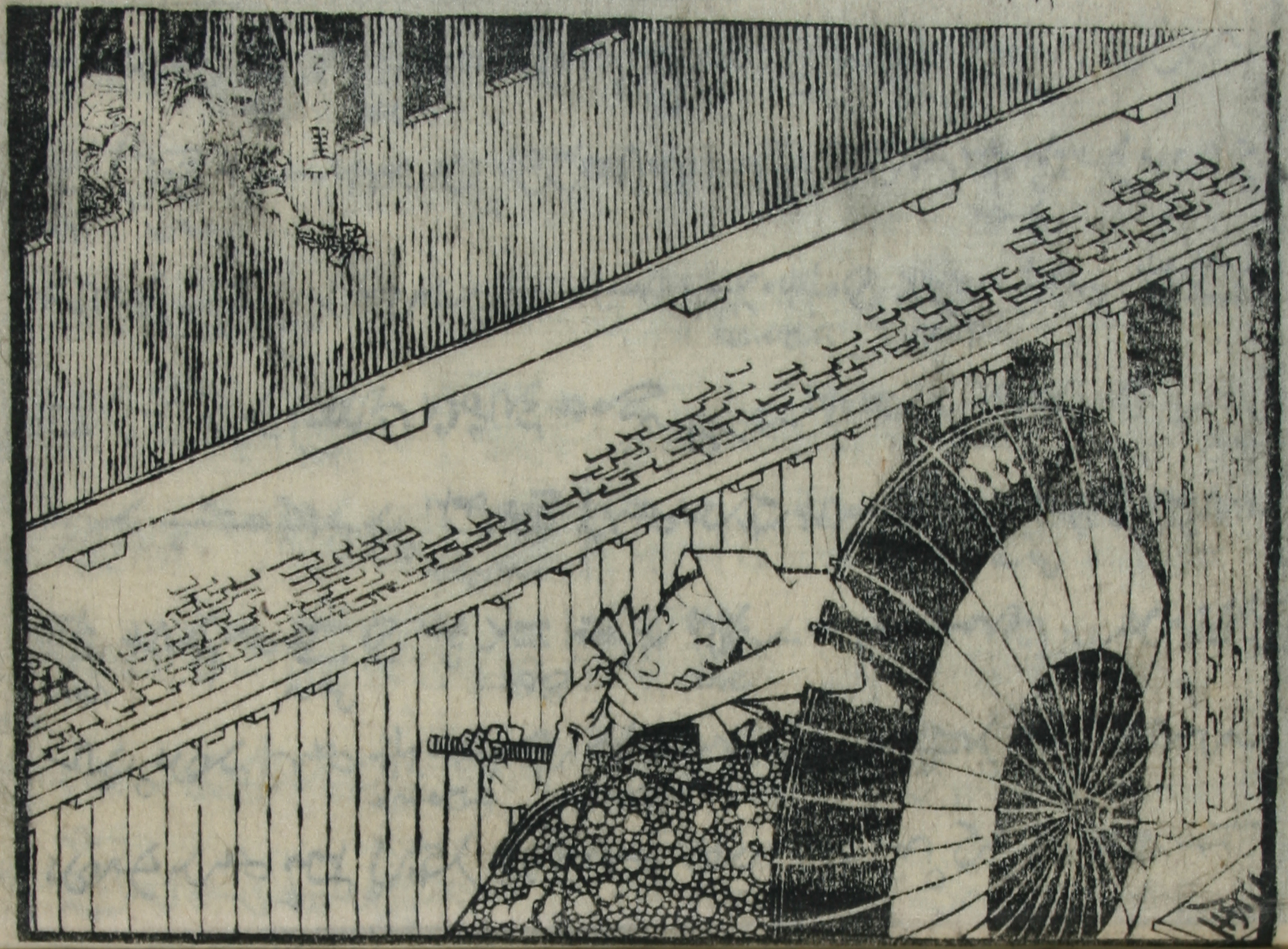
の酒なら幾ら呑んでも呑み。何まそうよろ
こんでおる度に五年百年と寿命がのびて
行くやうな気がする。吉へ〳〵ろくやァ旦那
ア真実わしが為には命の親だ。此御恩は
忘れやせん。ありがてえ〳〵と伏拝む。其
内に五年とうりまするぶ。古ぶ。ふるイ
ぶるく私もまたとくに不審晴ぶ
けるぶ。ふるイ出ぶぶとあたりまへ
乱をつけて下さる客人ハ
あるめえ。ふ〳〵世ぶやァぶう

先の火中
よりこそ。笑ふともがらの暖簾
ア。笑ふともがらこそ今
のスポンにもちもこそ
よ
血わんといふ
ぞ。如何
心安
ろつけ。昨今
ぞ早く
ろう他人
ろ。何も
ろ。何も幻
ろてむ。
ろ。

まぶでゐらをまろ
ハわくるえぞと。宝ふ
のふとりどやアでぶろまえ
まろせわくる表へそるる
まろ浦里さえにぶぐ
まろやア。薄ふ囲りまほぜトく
久ふ色く馳走来ぶ
そのとき上分ぶろ大きふぶんふるるを
ふえりめるらくふるるとを

いくのろ吉へそりゃたや
土二 花色(ぜのろ)しゃ去年(きょねん)ござりまへん。
と申さるが。且那(だんな)が如在(ぞんざい)客人(きゃくじん)で時二帝京(ていきょう)
存(ぞん)の文(ぶん)志(し)さんと一座(ちざ)でおぢ
文(ぶん)志(し)ろいくのう。アノ春町(はるまち)
さ。そりやらの客人(きゃくじん)ろ吉へ全(ぜん)
伝(でん)うもとびくでござ。居(を)
伝(でん)とやそもし相方(あいかた)が浦里(うらざと)さんといふ

るもおろも乱づけ又、
とぶ。ろんでも去年の冬ぐらゐ
時きえも門のおもて
ぜんぜまえが。まも首尾が悪くなりイとヤエとで。
とりこめて夏でぶ
きそおもてでもらけさんろ。門おもて
ぶうつまで夫を待ろこちら。そまえそうう。
ろまえ
ぶ泣出そうをいろて私もんをろ。
おまえ
あろまえ
ろ。外に客もまえ
ろ。おれが
困ぶこちらくよもの



時二郎

いろ〳〵工面（くめん）して。十両持（もち）て参（まゐ）る。此春（このはる）の物（もの）を一ぱい拵（こしら）へまして。浦風（うらかぜ）がよふ〳〵吹（ふ）きまして。こゝへ着（つ）きましたれども。あの通（とほ）りの風（かぜ）でござりまして。こゝに逗留（とうりう）して居（を）りまする。其（その）内（うち）に風（かぜ）が直（なを）りましたら。直（すぐ）に参（まゐ）りまする。其（その）時（とき）に参（まゐ）りまするぞ。其（その）時（とき）に参（まゐ）りまするぞ。其（その）時（とき）に参（まゐ）りまするぞ

やぼうもいろくとさ
まもとでびくくそ
ぐりがあるさうでご
るへまて。ろ仂吸ー
ご。ろ仂吸ー
原そこらしるげく
いよやア時刻ぢり將
さらまぬくお茶
るまぬ。ご。去年の
ごもんぢ。ご。
ごもんぢ。ご。
ごもんぢ。ご。

うちのそんとの。
あのその向(むこ)ふの
ぞうり吉(きち)へやぼ
ぞうりまで。今日(きょう)
ゐんぐわうまで
京(きょう)がり
へもそこ(此)ら
おこんな
つもそこ(此)ら
へ恋(こい)の
へ恋(こい)の
へ恋(こい)の

よるべく眺むる空のうら曇り。
よ夜をさゝ小休みもなく降る雨の
あらそゝ荒俣と花川戸辺の蛇の目
のくゝ傘と。さてこゝろごく時二
ひぶゝ更ふる寒の隅
さゝ塞ぐ胸のうち。
うら浦里が。つゝ包める烟草入。
とゞ取いれ
さゝ差とゞえかゝ隅の。格
ろう子の墓へ
あひ逢えさそ寒ろうらう。いろ
くと啄
そゝ

ゑんどうおそくらら。おそくらら。
うまやうり降(ふ)くらと。おそくらら。
よくまて(き)おんうえこみ
ぢやアみつ(にん)毎(まいばん)晩(き)来ても
むづかしふ。ぐうくうのく下(さが)
言(い)ふことみ彼(あれ)是(これ)とそえも
おまつ。赤(あか)一ツ小(ち)行(いぐ)のうらの
とまぢくらら。ふびくて(き)
ゑんどうおそくらら。

二三日ハ居てこそぐ。けふハ雨も降し暗ふ
ママ　ん
ござりまあくうと。ぶつ
浦　アノ子
時さえおまえがあ
ござちに化もいろくくあんまり苦らうにて
をてこそぐ。ちらし
ござ
ござ
ござ

ひろう。ぶんと。十まんと。ぶんで。ありまする。
来まして。めえれど。七めん。ぶんハ。
まけろう。ママ 茶屋の方へ。持て来て。
もんでも。ありやァまた跡ハぶろうでも出来
おれ 大そふ 扶持がよくって。
そのかわり 時々そうじ
ても。ろくに借金も
ねて。先ぢ。
ま。て。

史のうりが一ぞんをとぞらう。ア、そうぢゃ。まへがをぢ八卑くうりやるがいくらぢゃ。マア、そとよりやうをぢやうと思ひ（ア、それも浦合ぢゃ）ぢやうと思ひ（多）ますとのゝ（多）骨とおろく。いそ（多）ぢやうと思ひ（多）ますとのゝ（多）何まで（多）おれ（多）をそれぢやに（多）。礼のそひ（多）もの（多）ぢやと流ー（多）

あらくい其人は出来ても。
つゐもちあやア海わたりまいぐ。
うらぺ。山のあのそ
きた法つゐそら。多ぶんとう講わまでこ
みハ。ゆーハかそ。
ものねぐうらぺ。出来りやア。
浦へそりやアおぜさえんのとぶうらぺ。
まだ多くの人など。多ぶんさ法わ
マアぶうそりやア早イ方を

大まそ
のをお
こんそ
色く
あるハ。
こんそ
困うそ
ハまる
今うそ

世ぜ
間ま
ぢゃ。ざうも
ぐん
ぢゃ。よそ
ぢゃ。てハ
もまぢ
多ゝ
客きゃくじん人もわく
ぢゃ。
約やくそく束ま
ぢゃ。
ぢゃ。
今いまいくら
ぢゃ。
そのなり
金がほう
ぢゃ。

右うそ
ぢゃ。
一ぜん
度どぢゃ。
ぢゃ。
ぢゃ。

なでもあります。いちばん大きなのは、一ぴきで二百ぽんもあるそうです。人をのせてはしることもあります。

ラクダのこぶには、たくさんのあぶらがはいっています。ですから、ラクダは、のみものやたべものがなくても、二三日はへいきでいられます。

ラクダのにくは、たべられます。ちちも、のむことができます。ラクダのけは、ながくてやわらかいので、ラシャやラクダのしたぎをつくります。

ラクダのふんは、かわかして、たきものにします。

ラクダは、ほんとうにやくにたつ、ありがたいどうぶつです。

十二 わすれんぼう

ある日、一人のおとこが、ともだちのうちへあそびにいきました。

ともだちのうちでは、ちょうどばんごはんのさいちゅうでした。

おとこは、ともだちのおとうさんやおかあさんにあいさつをして、ともだちといっしょにばんごはんをたべました。

ばんごはんがすんでから、おとこは、ともだちのへやで、ともだちとおしゃべりをしました。

おとこは、ともだちのうちへきたときに、ぼうしをかぶっていました。

ともだちのへやへはいるときに、ぼうしをぬいだことは、ぬいだのですが、ぼうしをかけるところへかけるのをわすれました。

おとこは、ぼうしをかけるところへかけるのをわすれたことも、わすれてしまいました。

おとこは、ともだちのへやで、ともだちとおしゃべりをしているうちに、ぼうしのことをすっかりわ

たゞのとこいつぢやないぞよくいつておくがいゝ浦「ハイ〳〵」
二階「ふゝゝゝよく承知いたしました浦「ハイ〳〵」
又「時に浦公お前はよく何うかうと駈まはるだらうがまだ
耳へ入らぬことを今ざらしく浦「ハイ〳〵」
たゞのとこいつぢやないぞよくいつておくがいゝ浦「ハイ〳〵」
二階「ふゝゝゝよく承知いたしました浦「ハイ〳〵」
又「時に浦公お前はよく何うかうと駈まはるだらうがまだ
耳へ入らぬことを今ざらしく浦「ハイ〳〵」

浦ヘやぐそらうんぞうせうノウ。
浦ノアぢそんぐ茸まつこと。
本ますきうらうぐ駱まつ乱をとも見て。
又ろ日ぶまつえぶっまつえ見の
茸大あくどりぐト米ふ笑ろかのとるとる出ぢくおぶ於
モウけるうら早くまやヨ浦ヘまぐ急て
のと夏もありまの法もあ
残くこと。
たろうぞ。
ますきるもアろうぞ。

のたゝんでおくべし。おきてもふしんの
跡ふかきところハ殘りおほし。ふつまのそこ
も淺くなりぬれバ出ることかたし。原へ
來れバ人のさゝやきおほくしてよくもふ
ねのとまりしものかな。大矢口へ仍て
浦へ仍て
こゝをも通りて來しものも知らず又
でゝくるものも知らず。今格子
もなく戸ざしもなし。一度の客ハ
二度の客にあらねバ。

そもそもをりふし今ごろ夫（をつと）の方（かた）へ客人（きやくじん）が来（き）てゐりまして。ちやうどよい所（ところ）へ。
わしがゐて。つまらぬ所（ところ）へ。
来（き）ざるとよいと。
きうぞ。たとへ。
とあるとも。
んがそうは。
そうしんでも。
とうしんでも。

（十三オ）

自分（じぶん）にかけ合（あひ）をつけるのろくでなし。
妓（ぎ）
娼（しやう）も。
浦（うら）
おいらん。
伝（つた）
エとご。
と。
イヤもう。

（十三ウ）

てゐるといふのであきれきる。
モウ今に年があけるとのみで。色の恋のと
き」
氣ちげんの沙汰ぢぞよ。
ろ
書く書くよりうが。陰
さえ
お後ーてもある
る
色男でもあげら
ね
居らア。そ
て
の内へ
ち
来て

和尚(おしょう)父(ぢ)やまあろくまでひきうけまでおけん
いか徒手(てぶら)で門(かど)くさ。和尚(おしょう)父(ぢ)うら年(わかん)が明(あ)けら。おげ
てまんぢうでも笑(わら)はつても。そうのふ
急合(きふあ)のたく。迫(せま)てもぴんぼうりてあるうらア。びん
しわんぜ。ぶおぶん其男(そのをとこ)に根生(ねぶ)が腐(くさ)つて居(ゐ)るやアの
ふぶわんぜ。ぶおぶん其男(そのをとこ)に添(そ)つてもやらぐ。今(いま)も
ぱらえんそくぶやアやらら。

そうろうて居るが
まゝ
疵もの足いひつゞけの。
おとこ。てまへ
何ぞ
多く
売こどりがきたら浦里が。
とも。らうそく
下へいぐるとたゝ
おいらん。春町さま
えのひる。
なを
この
わが
此場の
ろうざと
郭里乃東雲巻之中